

Title	ヒルファディングにおける貨幣と信用：『金融資本論』分析・序論
Sub Title	Money and credit by Hilferding's Finanzkapital
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.6 (1977. 12) ,p.598(18)- 611(31)
JaLC DOI	10.14991/001.19771201-0018
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19771201-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヒルファディングにおける貨幣と信用

——『金融資本論』分析：序論——

飯 田 裕 康

1. 問題の所在
2. 貨幣論の構造
3. 紙幣と信用貨幣——信用の導出(1)——
4. 信用貨幣と銀行券——信用の導出(2)——
5. 信用と再生産 (以上本号)
6. 信用論の二元的展開
 - (1) 流通信用論
 - (2) 資本信用論
7. 信用制度と擬制資本
8. 結 語

1. 問題の所在

信用論は、信用関係が資本の再生産過程によって展開の必然的根拠を与えられることによって、固有の体系的な位置づけをなされるのであるが、さらに、信用関係が、貨幣の節約と密接に結びついているところからすれば、信用論はまた貨幣論ともきわめて密接な論理的関連を有するといわねばならない。⁽¹⁾しかし、このあとの方の問題を、明解に展開するためには、貨幣論と信用論との論理的次元の差異をあきらかにしておくかばならない。貨幣論は、その固有の課題を、商品流通としてなされる社会的物質代謝の過程を、貨幣がいかに媒介するか、あるいは媒介する根拠は何かをあきらかにすることのなかに見出すはずである。このような論理次元においては、貨幣の節約は直ちに信用関係の展開に結びつく必要はない。ただし、貨幣は商品流通のなかであって、つねに「発汗」されるものであり、たとえ一時的に節約され、流通の外に排出されたとしても、貨幣そのものを廃棄してしまふことはできない。無論、富そのものとして貨幣が蓄積されるならば別であるが。

注(1) 貨幣論と信用論との体系的関連性、その論理構造は一見自明のごとくであって、従来まで正面から論じられることはなかった。しかし、マルクスの『資本論』体系においては、第1部においてすでに信用の自然発生的基礎にかんする考え方が提出され、第3部第5篇第25章ではそれにある程度の展開が与えられて、貨幣論との関連が示唆されている。また、利子生み資本論の重視も、そのような示唆をいささか具体的に示すことになっている。他方、マルクス体系には、再生産論の側からの信用へのアプローチを指定する論拠も見い出される。これら二方向はいかに論理的に統一されるのか。なお、この論点にかんして、批判の余地はあれ、明確な理解を示すものは、飯田繁『利子つき資本の理論』1956年、および同『利子つき資本』1961年である。

ところが、ルドルフ・ヒルファディングはその『金融資本論』(Das Finanzkapital, eine Studie über die jungste Entwicklung des Kapitalismus, Wien 1910)において、貨幣論のもつ上記のごとき限界を考慮することなく、貨幣論を信用論の直接的な前提として説いている。このようなヒルファディングの方法にたいしては、貨幣論の内容そのものとかかわり合いにおいてもだが、流通主義的偏向として一蹴するのが通例のことである^(1a)。ここで、われわれは、ヒルファディングの貨幣論が、いかなる意味で信用論の論理的な前提とされているのかという、一見ヒルファディング研究では解決済みの問題に立返って見なければならぬように思う。それはまた、ヒルファディングが、信用の本来の基礎を、資本の再生産過程のなかに求めるという視点を、きわめて不明確にしか把握していないということを前提とした場合、信用の必然性論にかんする、かれなりの『金融資本論』中での補償として貨幣論との関連が説かれるにいたっているということまで考えるからである。

他面また、このような貨幣論と信用論とのヒルファディング独特の位置づけは、かれの信用論の展開の全体を、強く方法論的に制約するものとなっていることも看過されてはならない点である。

すでにわれわれは、ヒルファディングの『金融資本論』における理論構成のための、特徴的論理構造として、かれの方法的複線の理論展開を指摘してきた。これは要するに、ヒルファディングにおける理論経済学に課された二重の意図に対応している。1つは、かれが、自己の金融資本論=帝国主義論体系を、古典派からマルクスにいたる国民経済学の発展のうに位置づけ、それらの展開として意義づけようとする点であり、2には、最も発展した段階の資本主義=帝国主義を分析するという、より現実的な、ある意味で実践的課題の遂行としてである。これら2つの点は、たんに、『金融資本論』が編別上大きく二つの部分にわかれていることと関連するばかりでなく、個々の理論、カテゴリーの理論的把握のさいにしばしばとられている方法である。これが、ヒルファディングによってとられた意図的な方法であるのか、帝国主義なる資本主義の歴史的発展の特殊な局面に制約された避けがたい方法であったのか、これをあきらかにすることも、小稿の課題である。

2. 貨幣論の構造

『金融資本論』第1篇は、「貨幣と信用」とされ、第2篇以降の金融資本の分析に必要な理論的基礎を提供するものとなっている。このような金融資本論の展開にたいしては、従来から流通主義ないし、マルクス主義の歪曲なる批判がなされ、とくに第1篇のヒルファディングの方法自体に即した批判的分析はなされてこなかった。その理由の大きなものは、レーニンが『帝国主義論』にお

注(1a) このような方向からのヒルファディング批判の代表的事例として、後出飯田繁氏の論考をあげることができよう。

(2) 拙稿『金融資本論』の信用論「三田学会雑誌」, 69巻1号, 1974年。

いてなしたヒルファディングに対する周知の批判であろう。レーニンによれば、ヒルファディングは、帝国主義段階の支配的資本の形態としての金融資本を措定するという、きわめて重要な貢献をなしたにもかかわらず、生産の集積から独占を導かない点および貨幣論における欠陥は批判されなければならない。⁽³⁾このレーニンの示唆的なヒルファディング批評は、とくに貨幣論がいかなる点で欠陥を含むものであるかをあきらかにしていない。またわれわれは、レーニンのヒルファディング批評は、『金融資本論』第1篇全体にたいしてなされたものであるか、あるいは狭い意味での貨幣論にたいしてのみのものであるかをも確定しうる十分な文献的証拠を持っているわけではない。

そこで従来ヒルファディング貨幣論にたいする批判はもっぱら貨幣の必然性を中心とした価値論と貨幣論および、ヒルファディングにおける貨幣数量説的要素についてなされてきたといつて過言ではない。⁽⁴⁾またそのことは、すくなくともかれの貨幣論がマルクス『資本論』の展開を意図してなされた以上、当然のことであったといわねばならない。

ヒルファディング貨幣論は、3つの問題を中心に展開されたと考えられる。第1にそれは貨幣の必然性であり、第2には、いわゆる社会的必要流通価値の概念に示される貨幣流通(厳密には通貨流通とした方がよいだろう)の一般的法則の解明、第3のそれは、信用関係展開の基礎としての、資本流通と貨幣流通との関連にかんする検討。以上の3点をあげることができる。これらの3点は、貨幣の必然性にかんするきわめて方法論的色彩の強い論点から、現実の貨幣・通貨情勢につらなる当面解決を迫られている問題にまでわたる広範なものである。⁽⁵⁾そこで、ヒルファディングの貨幣論の全体としての特徴としてまずあげなければならないのは、理論的抽象的問題と、現実的具体的問題との混淆である。このような特徴は、とりわけ、貨幣数量説へのかれなりの対応のなかで明確に示されているところである。理論的な枠組として純粹紙幣本位制の設定と、紙幣流通の現実的背景とが、ここでは明確に論理的に区別されていない。

いまひとつ、貨幣論の特徴として指摘しうるところは、レーニンも、その帝国主義論にかんするノートの中で記し、注意しているヒルファディングのつぎのような一文である。

「エルンスト・マッハによれば、自我とは、一つの網をなして世界の像を形成する諸感覚の無限の糸が密集する一結節点にすぎないというが、同様に、貨幣も、個々の交換行為の無数の糸で織られている商品生産社会の社会的関連における一結節点なのである。同時に貨幣においては人間の社会的関係が1つの物に、すなわち、今なおその感乱的な輝きが、その前に目を閉じてしまう

注(3) V. I. Lenin, Hefte zum Imperialismus, s. 178. レーニン『帝国主義論ノート』(『レーニン全集』第39巻、166ページ、大月書店。

(4) 例えば宇野弘藏「貨幣の必然性」同『資本論の研究』1947年所収、飯田繁「ヒルファディングの信用理論」『講座信用理論体系』Ⅳ、1956年。

(5) これにかんする最近の労作として、戸原四郎「ヒルファディング貨幣論の現実的背景」『社会科学』28巻、4/5号、1977年(東大)がある。

という途を選ばない限り、かくも多くの経済学者の目を眩ませている一つの神秘的に輝く物に、
 なっているのである。⁽⁶⁾

これは、第1章貨幣の必然性におけるヒルファディングの方法をいかに表現するものと考えられるのであるが、レーニンは、「同様に、貨幣も……」に注記して、「同様にではない」として⁽⁷⁾いるように、たしかに、貨幣はたんなる交換行為の結節点にすぎないものではない。むしろこの結節点の背後に行為を超えて実現されねばならない本質があることを、ヒルファディングはまったく看過してしまうのである。

このことをさらに追究すると、それは、ヒルファディングにおける価値論の問題に帰着するとい⁽⁸⁾ってよいであろうし、また、このことはさらに、ヒルファディングにおける理論経済学の基本的な課題はなにか、という問題にもつらなる。われわれは、ここで、ヒルファディングにおける価値実⁽⁹⁾体の明確な把握に基づく、価値本質論の欠如を指摘しないわけにはゆかない。これについては、ここでは、これ以上立入って論ずることはしないが、われわれは、ヒルファディングの問題意識が、貨幣をたんに機能面において把えようとしたにすぎないとの理解をとらず、かれの貨幣論の方法論的意義を指摘しておかねばならない。

われわれの課題の追究にとっては、したがって、第2、第3の問題、いわば、貨幣の流通法則論と、信用の導出の問題がより重要である。しかし、貨幣の必然性について説かれたかれの方法的独自性は、やはり信用論の展開に一定の方向づけを与えたものとみななければならない。すなわち、交換をもって貨幣発生⁽¹⁰⁾の基礎過程としたことは、信用をもその延長線上に展開させることになったのであるが、それにもまして、信用が社会総資本的視角から個別資本的視角への転換と関連づけられ、競争次元との一定の関連において説かれる途をふさいでしまったものとみることができる。すべては、交換に解消されることになるのである。これは、信用論において展開される資本信用論の複雑な論理構造をとってみればあきらかになる。とりわけ、擬制資本の運動による独自の信用関係の展開は、信用本来の基礎とはまったく無関係に説かれるにいたっているのである。

ヒルファディング貨幣論の理論的欠陥の1つは、価値尺度論の展開が、たんに商品に体化されている労働の大きさを測定する問題として、社会的労働量の計測なる内在的尺度の問題としてのみ把

注(6) Rudolf Hilferding; Das Finanzkapital, eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus, 1910, s. 33 岡崎次郎訳『金融資本論』(岩波文庫)上, 29ページ。なお、以下の同書からの引用は原書は1968年Wienにて刊行された Europa Verlag 版のページ数と岡崎訳ページ数とを、Das Finanzkapital と略記する。

(7) Lenin, a. a. O., S. 308, 大月版303ページ。

(8) この点は当面、高山満氏の「ヒルファディングにおける『理論経済学の問題提起』」『東京経大会誌』26, 1960年をはじめとする一連の諸労作を参照されたい。

(9) 価値資本論については、遊部久蔵『古典派経済学とマルクス』1960年を参照。

(10) これについては、拙著『信用論と擬制資本』1971年を参照されたい。

握され、外在的価値尺度機能にはまったくといってもよいほど言及されていない。^(10a)すなわち、価値尺度が貨幣の第1の最も基本的機能態様であることが明確にされず、したがって貨幣商品・金の意義についてなら理論的には明確にされずに終わっている。この原因は、ヒルファディングが、価値形態論と、交換過程論との貨幣の必然性把握のうえでの論理次元の相違を看過していることに求められるが、⁽¹¹⁾さらには、さきにも言及したように、貨幣商品・金が価値の絶対的実在として現象しなければならぬ商品生産労働のもつ独自の社会的性格がつかまれていないことにまで遡ることができる。このため、ヒルファディングは、貨幣を直ちに流通手段として、あくまで交換関係の一構成要因としてのみ問題とするにとどまるのである貨幣を機能論からのみ把握しようとする。

『金融資本論』第2章「流通過程における貨幣」は、貨幣を流通手段としての機能において把握するヒルファディングの見地が明確にされているが、かれの関心の中心は商品の価格総額に従って流通量を規定される貨幣から、ただちに流通過程における空費をなすものとしての貨幣に移行し、つぎのようにのべる。

「貨幣とは何であるか、はすでに見た。一物において表現された一つの社会的関係である。この物は、直接的価値表現として役立つ。しかし、 $W-G-W$ なる関係の内部では、諸商品の価値は常に他の一商品の価値によって置き換えられる。したがって貨幣表現は瞬時的であるにすぎない。かくて貨幣表現は単に技術的な便宜手段として現われ、この手段の使用は、可能な限り避けられるべき空費の因となる。貨幣が生ずると同時に、貨幣を排除しようとする努力が生ずる。⁽¹²⁾」

これによると、ヒルファディングは、商品＝貨幣関係のもとの、価値と価格についてまったく理解を示していないことがあきらかである。貨幣は一つの社会的関係を表現するが、それはいわれるごとき、抽象的な関係としてでなく、自らを価値の絶対的定在として措定することを通じてである。このことと関連して、かれは、商品の価値形態と価格形態との関係をまったく理解していないといわねばならないであろう。このことはたんに価値形態論にかんするヒルファディングの把握が明確さを欠いていることからだけでなく、貨幣が商品交換の現実的過程から必然化される根拠と、貨幣における価値表現の独自性を、同一の論理次元にあるものとするに由来しているのである。すなわち、ヒルファディングは、ここで本来ならば、貨幣における価値の表現と、交換過程における矛盾の解決とが、単に価値尺度機能の措定によって同時的に果たされるだけでなく、金貨幣の措定が、そのことと不可分であることを併せて明瞭に指摘しなければならなかったはずなのである。したがって、価値が貨幣によって表現されることは、けっして便宜的手段としてなされている

注(10a) ヒルファディングの価値尺度論を論じたものとして長坂聰「貨幣論考——ヒルファディングの価値尺度論——」『唯物史観』14, 1974年がある。

(11) 例えば宇野, 前掲書におけるヒルファディング批判がこれに当る。

(12) Das Finanzkapital, s. 39, 上37ページ。

のではないし、その意味で流通は金貨幣を完全には排除できないはずなのである。

このようにヒルファディングが、貨幣のもつ価値の絶対的定在としての属性を見落とし、金貨幣の独自の意義づけに失敗したことは、かれの貨幣論を、かれ自身の概念措定に従えば「社会的必要流通価値」の措定に導いたが、同時にそれは2つの点で特徴的である。1つは、かれ自身が「貨幣は、価値結晶としては必要に見え、等価形態としては余計に見える⁽¹³⁾」とのべているごとく、等価形態と価値結晶とを機械的に切り離れたのちに、等価形態としては、国家による意識的規制が可能だとみる論点。いま1つは、貨幣を金から徹底的に解放してしまおうとする論点、以上の2つである。そして、これら2つの論点は、社会的必要流通価値の「論証」のための純粹紙幣本位の想定につながってゆくものである。

むしろ、ヒルファディングは、金属貨幣の役割や意義を完全に否定ないし忘却してしまっているわけではない。しかし、一方では、かれは金属貨幣を、社会的関係の物的表現とのみみるにとどめるとともに、他方では、第2章において分析されているオーストリーの貨幣的情勢との関連で、いわゆる貨幣数量説の批判のために留保している。ヒルファディングはその点で大きな混乱のなかにいる。というのも、純粹紙幣本位を、社会的必要流通価値の論証の手段としながら、他方で、純粹紙幣本位の不可能が客観的価値論(労働価値説)の証明になるとの指摘をもなす⁽¹⁴⁾のであるから。

3. 紙幣と信用貨幣

—信用の導出(1)—

ヒルファディングの貨幣論は、価値論すなわちかれの商品論の不徹底から、金貨幣の独自の役割や意義を展開することができず、とりわけ、紙幣流通と、金属貨幣との関連や、紙幣の流通とってのいわゆる流通必要金量なる概念をまったく考慮しない。このような貨幣把握が、いかにかれの信用の導出の論理を制約したのであろうか。

ヒルファディングが紙幣を問題とするのは、自由鑄造禁止下——すなわち金本位制の重要な条件の一つが欠如しているところで——の価値尺度機能はいかにたされるかということからである。一見きわめて正当な問題提起のごとくでありながら、ここではあくまで価値尺度機能が問題とされ、何が価値尺度たりうるかはあきらかにされていない。だから、かれは、自由鑄造禁止下では、「流通手段は、貨幣章標、したがって金章標になるのではなく、価値章標になる⁽¹⁵⁾」としなければならないのである。はたして金章標と価値章標とが、ヒルファディングの考えるほど大きな差異をもつものかどうか疑問であるが、紙幣はここでは、あきらかに金との関係、すなわち金の代表関係を切断さ

注(13) a. a. O., S. 39, 上38ページ。

(14) a. a. O., S. 67, 上80ページ。

(15) a. a. O., S. 65, 上74ページ。

れている。このような性質を有する紙幣が流通に入るのは、紙幣をもつとする金の代表が、無政府的商品経済の作用を排除しようということにかかっている。紙幣は、ヒルファディングよると、流通最低必要量においてのみ流通した。その部分にかんしては国家的規制が、すなわち意識的規制がなされると考えられる。であるがゆえに、この最低限が金属貨幣の節減を目指して、しだいに拡大することがあれば、「意識的に規制された社会関係⁽¹⁶⁾」もまた増大することになる。

こうして金属貨幣すなわち金貨幣から引き離された紙幣の流通への投入は、その規制を商品価値総額との対応という形態においてのみなされる以外にはなくなるのであって、社会的必要流通価値の規定も、紙幣流通の独自の法則として、ここに固有の役割をあきらかにされることになる⁽¹⁷⁾。

純粹紙幣本位の想定は、ヒルファディングのかかる論理の当然の成りゆきである。かれは、自由鑄造禁止下においては数量説が妥当するものとするのであるから、この純粹紙幣本位のもとにおいても、一方に商品価値総額が、そして他方に流通紙幣の総量が対置され、その対応および調整は、商品価格の変動として具体的になされることになる。だから、「総流通においては、与えられた瞬間に交換されるべきすべての商品が、単一の価値額として、一体として、作用するのであって、この一体に対して、紙幣量が、交換の社会的過程を通じて、等しい一体として、対置されるのである⁽¹⁸⁾」ということになる。いずれにしろ、ヒルファディングにあって紙幣は、流通必要最小限を充足するものではあれ、その流通が、金属貨幣の場合とはことなる独自の価値規定によってなされる。しかもこのことは、「生産者の共同の行動⁽¹⁹⁾」によってはじめて可能となるのである。紙幣は、観念的な、実体のない価値にもとづく交換のいっそうの組織化(意識的規制)であり、それによる金属的基礎からの貨幣流通の解放を結局のところ論定することとなっているのである。

これにたいして、ヒルファディングの信用貨幣論は、支払手段としての貨幣の機能から導かれるものであるが、それはつぎのことを認識の基礎としている。すなわち、「貨幣が支払手段として作用する場合には、まさにこの、一価値の他の一価値による直接的代置が解消されているのである⁽²⁰⁾」との主張である。したがって、ここには、支払約束が登場しなければならず、この支払約束である手形がまず信用貨幣としてとりあげられる。手形は貨幣として機能する。この意味で手形は信用貨幣なのである。したがって、ヒルファディングにあっては、一価値が他の一価値による代位から解放されていることにおいて、紙幣(価値章標)も信用貨幣も同一の特長を有していることになる。このことは、かれの信用貨幣論の核心の1つを構成する点である。

紙幣と信用貨幣との差異は、ヒルファディングにおいては、以下のように把握される。

「かくて、社会的産物として流通から生ずる強制通用力ある国家紙幣とは反対に、信用貨幣は、

注(16) a. a. O., S. 40, 上39ページ。

(17) a. a. O., S. 65, 上77ページ。

(18) a. a. O., S. 65, 上74ページ傍点引用者。

(19) a. a. O., S. 69, 上82ページ。

(20) a. a. O., S. 72, 上86ページ。

社会的にではなく私的に保証されたものであり、したがって、常に貨幣に転化されうるもの、兌換されうるものでなければならない。この兌換性が疑わしければ、支払手段の代用物は、あらゆる価値を失う。したがって、支払手段としては、貨幣は支払指図証によってただ代位されうるにすぎない。この指図証は、相互の組合せによって相殺されない限り、貨幣に換えられねばならない。⁽²¹⁾

この把握に特徴的なことは、貨幣が支払手段として機能するにいたるような商品流通の発展段階が、商品取引当事者間に債権債務関係をもたらすことによって、商品社会全般に及ぶ効果が示されることをおいて、ただちに、手形を信用貨幣として規定することである。なるほど、債権債務関係自体は私的かつ個別的な取引関係であり契約関係であるが、支払指図証の流通と同時にその関係は社会的なものに転成してゆくはずである。であるからこそ、貨幣の社会的機能定在である支払手段機能も指定しうるはずである。いまこの関係が信用関係であるとするならば、信用関係は、決して私的・個別的関係にとどまるものではなく、社会的に展開される関係である。信用貨幣は、したがってこのような信用関係そのものが社会的に展開される契機を内包するものとして指定されなければならない。ヒルファディングは、この点すなわち信用関係展開の社会的契機としての支払手段としての貨幣なる点を看過してしまつて、支払手段と信用貨幣とを、その貨幣機能面において比較し、両者間に代替可能性を見るにとどまるのである。

これにたいして、同じヒルファディングの『金融資本論』の論述のなかから、信用貨幣流通の効果についてのかれのつぎのような指摘を引き合いにだすこともできよう。

「かくて信用貨幣は、資本家相互間の売買に基づいて生ずる。それは、流通の内部で、且つ流通に基づいて生ずる。信用貨幣の効果は金の現存額による制限から流通を解放することにある。⁽²²⁾

信用貨幣流通による効果は、ここにあきらかにされているように、流通を金の現存額から解放することで、その点では、国家紙幣が流通に投ぜられた場合と基本的には一致する。ただ相違は、信用貨幣が、金の流通への圧迫を完全に除去(?)しうるのにたいして、国家紙幣は、流通最少限をカバーするにすぎないことである。だから、信用貨幣も国家紙幣もその減価する側面では同様に取扱われることになる。無論、紙幣の減価といつても、両者はまったくことなつた事態を指しているはずである。「信用貨幣の減価」というヒルファディングの把握そのものが内容的に不明な要素をもつが、信用貨幣においては、兌換によって維持される信用関係の崩壊あるいは、それへの不安が、減価の内容であり、国家紙幣においては、流通必要金量に対する関係を内容としている。この場合においては減価は、既存の信用関係にはもとより、流通過程自体には間接的にかかわるにすぎない。すなわち、紙券としての両者の減価構造の相違は、両者がいずれも貨幣の機能的定在から措

(21) a. a. O., S. 72, 上87ページ。

(22) a. a. O., S. 75, 上91ページ。

定されるという了解以上の内容を含むものとみななければならないのである。国家紙幣の減価はインフレーションによる物価体系の名目的変更であるが、信用貨幣の「減価」は、恐慌すなわち再生産過程の暴力的攪乱を背景としている。

このことに関してヒルファディングは、まず、「減価」一般を信用貨幣と紙幣との役割上の共通性としてとらえている。役割上というのは、両者がいずれも金貨幣そのものの節約に通ずるという点である。そして、この背後には、貴金属から解放された流通という現実的要請がある。

信用貨幣の規定は、ヒルファディングにおいてはしたがって、さきにもみたとおり、機能形態において金貨幣の節約として、それに代替するものとして説かれているのである。しかしこれは、信用それ自体にたいする規定と、信用貨幣の規定とを混同した議論である。このような論理からするならば、貨幣代替物という一般的規定において、したがって「貨幣」側からの一義的理解として紙幣も信用貨幣も把握されるにいたるであろう。ヒルファディングによれば、「貨幣の代位は、直接に、流通過程の無益な費用の節約をなすものである⁽²³⁾」として信用貨幣の節約規定が明示されるのではあるが、これが、信用それ自体のはたす節約機能(これにかんする規定)としては明らかにされていない。この点に、ヒルファディングの体系における信用導出の論理の最大の問題の一つがあるといわねばならない。

4. 信用貨幣と銀行券

——信用の導出(2)——

国家紙幣と信用貨幣との対比にかんするかぎり、一方が、公権力を背景にし、他方が、私的な経済関係を背景にしているという相違のみならず、ヒルファディングによってより強い関心をもって注目されたのは、機能上の両者の共通性であった。すなわち、紙幣も信用貨幣も、いずれも金貨幣の節約をはたすという点においては共通性をもつものである。ところが、ヒルファディングは、両者における金貨幣節約の構造上の差異にはほとんど触れるところがない。せいぜい、前述のごとき背景に言及しているにすぎない。これでは、この背景そのものが有する意義の決定的相違から両者の本質的差異を明確にし、貨幣流通と信用関係との関連について確たる認識に到達することはとうてい不可能であったといわねばならない。

元来、国家紙幣は、流通手段としての金貨幣の節約にたいしては、一定の効果をはたしうるものである。紙幣の代表金量は、それによって節約される金貨幣の数量が明示されていることでもあるが、他方、国家紙幣は完全には金貨幣に代位しうるものではないことは、紙幣流通の独自の法則があきらかに示しているところである。ところが、信用貨幣——さしあたりこれを商業手形と考える

注(23) a. a. O., S. 76, 192ページ。

と——は、貨幣にたいする請求権という権利・義務の関係、すなわち契約関係を通じて、取引当事者のいずれかにおける貨幣負担を軽減する役割をはたすが、ここではあくまで、手形上の権利・義務の關係に制約されて貨幣負担そのものを無くすることはできないと考えなければならない。したがって手形の「流通」の根拠もこの關係に、同様に制約されているわけであって、その流通がただちに金貨幣の全面的節約を果たすわけではない。無論ヒルファディングも、節約が全面的であるとはのべていないのであるが、国家紙幣との共通性を強調する観点からするならば、信用貨幣の流通における全面性・拡張性をやはり念頭に置いているものだとみななければならない。

ヒルファディングが、かくのごとく、信用貨幣の流通性に紙幣と共通な要素を見るとき、そこでは、銀行券、とりわけ中央銀行券の流通性と国家紙幣の流通性とが重なり合う關係として把握されているとみてよいであろう。しかし、このような信用貨幣の把握自体、大いに問題を孕むものだといわねばならない。というのも、ヒルファディングにおいては、信用貨幣の段階的展開について、すくなくとも、貨幣論的次元においては明確な認識がみられないからである。

信用貨幣は、その発生と同時に銀行券であったわけではないのであるから、信用貨幣の諸形態が展開する諸段階における性格の差異は、信用貨幣自体の「流通」の形態をみる場合にもきわめて重要な視点とならねばならない。すなわち、流通性の展開の背後に信用關係自体の展開をみななければならないであろう。同時に、この視点において重要なことは、信用關係の展開が、金貨幣の節約から出発しながら、他方で、金貨幣自体を、社会的に集中すること、言いかえれば、金属準備の社会的形成を通じて、単に貨幣流通次元においてなされる貨幣蓄蔵とは異質の蓄蔵關係を展開することに注意しておかねばならない。国家紙幣は、その流通性がいかに拡大しても、上述のような「機能」を展開することはできない。ここにわれわれは、信用貨幣「流通」の独自性をみておかねばならない。

この点をさらに別の角度からみるならば、国家紙幣は、その投入される契機と道程からして、資本の再生産過程にとっては、外的にのみ関与し、それに組み込まれることがない。これにたいして、信用貨幣が、純粹にその形態を展開するのは、資本の再生産過程の流通契機と、その背後にある産業資本の剰余価値生産および実現のより具体的、現実的側面に由来しているのである。この点からしても、ヒルファディングの信用貨幣把握は、それを、資本の再生産から切り離し、論理的に抽象されたその貨幣的形態規定の次元においてのみなされているのであり、信用貨幣の眞の形態規定論の展開をなしているものとはみなしがたい。このことがさらに、かれによる銀行券の把握にたいしてもそれを一面的になさしめる原因となっているといわなければならない。

ヒルファディングは、手形の相殺による現金（金貨幣）の節約に信用貨幣流通の基礎をみているのであるが、それは、以下のごとき論理構造からなるものである。

まず銀行は、かれにあっては、マルクスが『資本論』第1部第3章において説いたように、支払

準備金の集中としてではなく、手形相殺の機構(施設)として把握される。ここでヒルファディングでは、銀行における貨幣流通的な側面と、信用制度的側面とは区別されることなく、むしろ手形交換をもってその主要な業務とされる⁽²⁴⁾。すなわち、銀行は、商業信用に銀行信用をもって代位するのであるが、そこで代位されるものは銀行の手形が個別産業資本家や商業資本家によって振出された手形に代置されることである。これは、ヒルファディングによって、「手形信用」と⁽²⁵⁾されている。

ヒルファディングは、独自の銀行券論を展開するに先立って、いわゆる流通信用論をのべる。流通信用とは、「生産的資本家たち自身のあいだで行われる信用」⁽²⁶⁾とされ、さらに「我々が見たように、それは貨幣に代位し、したがって、費用のかかる金属を節約する。なぜならば、それは貨幣の介入なき商品の移転を意味するからである。」⁽²⁷⁾としている。見られるように、ヒルファディングはここでマルクスのいう商業信用の規定を念頭に置いているのであるが、あくまで、金属貨幣の節約としてそれを規定している。ところが、この流通信用が、同時に「手形信用」でもあることから、事態は複雑な展開をなす。すなわち流通信用に、生産的資本の配分や調達機能が導入されるからである。生産的資本の大小は、個別諸資本の再生産(資本の循環)に影響を及ぼし、資本の個別資本的蓄積過程を構成する主要な契機である。流通信用がかかる側面を担当するにいたれば、それはたんに、生産物の価値実現の部面を離れた、剰余価値の直接的生産部面にかかわりを持つことになる。他方、ヒルファディングによれば、流通信用は手形信用として扱われている。そして、手形は「信用貨幣として機能」⁽²⁸⁾する。この手形の信用貨幣としての流通の側面と、流通信用のより展開された側面とが、ともに流通信用として展開されるために、信用貨幣流通の拡大と、信用の創出なる事態とを結合する。これが、この論点にかんするヒルファディングの展開の特徴である。

この結合は、信用貨幣としての手形が、銀行券にまで画一化されて流通し、さらに、この銀行券が、丁度国家紙幣が有したと同様の性格をもって国家的監督下に流通させらるゝと考えるのである。このことについてヒルファディングはつぎのように言う。

「一つの変化、といっても経済的諸法則を廃棄するものでない変化を、国家の干渉が初めて惹起する。この立法の目的は、銀行券の兌換性を確保することであって、それは、銀行券の発行が直接または間接に制限され、且つ国家の監督下にある一銀行の独占となされることによって、行われる。国家紙幣が存しないか、または社会的最小限よりも遥かに低い額に制限されている諸国では、さもなければ国家紙幣に属する場所を、銀行券が占める。」⁽²⁹⁾

注(24) a. a. O., S. 102, 上125ページ。

(25) a. a. O., S. 102, 上125ページ。

(26) a. a. O., S. 102, 上125ページ。

(27) a. a. O., S. 100, 上123ページ。

(28) a. a. O., S. 99, 上122ページ。

(29) a. a. O., S. 103, 上127ページ。

これは、いわゆる銀行立法に触れたものであり、『金融資本論』における中央銀行論の最も明確に展開された箇所だといってよい。だが、この中央銀行論は、マルクスのいうナショナルな銀行の側面を強調したものであり、かつ、中央銀行の発行する中央銀行券が強制通用力をもつ国家紙幣と、初発から同一視されている点において、きわめて大きな問題を孕むものである。ここでは、発券が一つの銀行に集中される論理と、中央銀行としてナショナルな性格をもつことが混同されている。これに先立ってヒルファディングは、銀行券を一般的に考察し、それを「銀行業者引受の手形⁽³⁰⁾」とし、銀行券の流通の基礎を手形流通に求めている。しかし、これらをして、国家紙幣とは本質的にことなつた契機によるものとして、両者の差異を強調するのではなく、両者における共通性すなわち保証の形式上の同一性に着目し、かつ、国家的規制の及ぶ対象とするのである。したがって、結局のところヒルファディングの考え方は、銀行券をして、交換にたいする意識的規制の一形態だと観念するものとみなしなければならない。

以上にみたごとく、ヒルファディングの信用貨幣論は、本来私的取引関係（純粹の商品経済的關係と個別諸資本家相互の關係）である手形の発生、流通に基礎を置くものではあるが、それが、銀行券にまで上向するにさいして、その論理展開の基軸は、信用関係を基礎とし、信用関係の発展として示されるものではないことがあきらかになる。すなわち、信用貨幣としての銀行券は、必然的に国家紙幣の代替物として、国家の独自の規定のもとに流通するものとされるにいたる。それに加えて、信用は、貨幣流通次元の問題として、とりわけ、貨幣代替物の流通の保証の根拠として把握されねばならなくなる。このような、信用においてたんに貨幣的契機のみをみようとするヒルファディングの独特の思考法は、一面信用による金属貨幣材料の節約の側面を明確にすることに役立っているものとみることができる。たしかに信用は、貨幣材料の節約をはたすことを可能とするであろうが、それらは、その限りでは——換言すれば、ヒルファディングが想定しているような手形信用においては——個別的にのみ実現されるにすぎず、それらが社会的になされる方向を必然化するような信用関係展開の根拠とはなしがたい。貨幣の節約と同時に、流通過程に拘束される支払準備金を他方に保持せねばならないこと、この両要因の矛盾・対立は、信用関係の展開がたんに貨幣流通的契機によってははたされがたいことを意味しているといわねばならないであろう。

5. 信用と再生産

小稿のはじめにも指摘したように、信用論の展開にとって信用と再生産の結節の主要な契機を明確にすることは、信用の基礎理論の第1に果たさねばならない課題である。この点にかんして、すでに前節までに分析してきたように、ヒルファディングの展開は決定的な不十分性をもつものと考

注(30) a. a. O., S. 102, 上126ページ。

えねばならない。というのも、ヒルファディングは、『金融資本論』の信用論において、貨幣代替物としての信用貨幣流通の論理を貫徹させ、そのうちに、信用の展開する主要契機をすべて包括してしまおうとするからである。しかし、たしかにヒルファディングは、かれなりの信用と再生産とにかんする把握がみられる。われわれは、『金融資本論』体系における上述のごとき信用導出の特異な論理構造を、かれの信用論展開の過程のなかにあきらかにしてゆかねばならない。

ヒルファディングの『金融資本論』における再生産論の特徴は、再生産における流通過程の諸契機を重視することである。このことをもって、われわれは直ちにかれが流通主義に立脚して理論を展開したとはいいがたい。なぜならば、マルクスが古典派や俗流経済学者にたいして、かれらを流通主義とすることと、マルクスの展開を知り、それを継承する立場にあるヒルファディングとはその位境をまったくことにするからである。しかし、かといって、ヒルファディングの再生産論が、すべて方法的に十分な、周到な論理的前提の上に展開されてるかということ、そうともいえないであろう。この点、かれが、自身の体系を交換の展開に求めたことは、方法論的にみてここでも決定的であったとおもわれる。すなわち、ヒルファディングの再生産論の基礎をなすものは、商品流通によって媒介される、社会の物質代謝の立場である。いわば、物質代謝という抽象的論理次元において把握された立場なのである。このことのヨリ具体的展開は、貨幣論やそのなかで主たる論点をなす貨幣の機能論の展開のなかにもあきらかである。かくして、ヒルファディングにおいては、剰余価値の生産の局面よりはその実現の局面が主要な関心事となることになり、資本家社会の再生産構造は、実現過程をなす流通過程における資本家相互の関連から見通されることになる。

ヒルファディングは、『金融資本論』第4章において、資本の循環過程を分析の対象として取り上げ、そこでの資本の形態転換の各段階について信用関係の成立の可能性を検討する。そして過程G-Pmに着目してつぎのようにのべる。

「我々がここで問題にするのは、商品流通そのものから、貨幣機能の変化から、流通手段から支払手段への貨幣の転化から、生ずる信用だけである。これに反して、単純な貨幣所有者と企業者⁽³¹⁾とへの資本家の機能の分割から生ずる信用は、ここではまだ考察されない。」

みられるとおり、『金融資本論』において信用の間われる仕方は二重である。1つは、貨幣の機能変化からであり、いま1つは、資本家階級の分裂からである。しかも、第1の論点にかんするかぎり、ヒルファディングの論理は逆立ちしている。貨幣の機能変化から信用関係が生起するのではない。信用関係は、商品流通のいな、商品の価格実現の条件に関連してその自然発生的姿態を顕わにする。かれが、この論点に関連して、本来表現したかったことは、信用によって貨幣が支払手段機能を体化することによって、貨幣そのものの節約がはたされるということであり、さらに、それは、資本家社会的には資本力の増大に結びつくことである。ことに特徴的なヒルファディングの論

注(31) a. a. O., S. 83, 上101ページ。

理は、貨幣の機能展開と信用とを、しかも資本家的なそれとを直結しようとする点である。

このような展開方法は、信用と再生産との関連にかんしてみれば、2つの問題を含んでいると考えられる。第1に、再生産過程としての資本の循環運動は、それを媒介する貨幣の側面からのみ把握されてくること。このことは、信用制度下における貨幣流通の特異な問題、すなわち前貸されるものが貨幣か資本かというマルクスによって提起された周知の難解な理論問題を事実上解消してしまおうとするものである。第2にあげられる点は、信用が再生産過程において必然化される論理構造が、個別資本家の個別的契機にのみ依拠して把えられることとなり、信用を措定する社会総資本的な（あるいはGrundrisseのマルクスに即して言えば、「資本一般」的な）根拠が見落されてしまうことである。

なるほどヒルファディングは同じ第4章のなかで、貨幣資本の周期的遊休化の必然性をとき、そこから信用の役割を説いている。いわば、遊休貨幣資本の生産資本への転換である。しかるにこれは、さきに引用したところからもあきらかなように、社会的には何ら資本力の増進を結果するものではないとされるのである。したがって、この契機は、それが再生産過程に根差す主要なものだとはいえ、ヒルファディングにあっては、信用と再生産の結切の必然的根拠ではなく、まったく別の契機をなすのである。こうして、ヒルファディングにおける信用の必然性論は、貨幣機能論の次元から結局のところ出ることができなくなってしまう。そこに新たな信用関係展開の契機として提起されるのが、いわゆる資本信用なる概念である。この資本信用概念は、のちに検討を加えるごとく、きわめて多様な内容を包括しており、さきにわれわれが引き合いにだした流通信用と対抗するのであるが、それはまたあい重なる意味をも有している。こうして、ヒルファディングにおける信用の理論的把握は、二元的になされねばならなくなる。（未完）

[1977, 11, 19.]

(経済学部教授)